居場所（安心できる人）評定の地域間及び性別比較

－日台大学生調査から－

Regional and Gender Differences in *Ibasho* “Person who eases your mind”:

A Survey in Taiwanese and Japanese Students

岡村　季光・林　伯修・朱　文增・鍾　慧于
陳　福士・新井　一郎・多根井　重晴
Toshimitsu OKAMURA, Po-Hsiu LIN, Wen-Tseng CHU, Hui-Yu CHUNG,
Fu-Shih CHEN, Ichiro ARAI & Shigeharu TANEI

要旨

本研究では，居場所（安心できる人）の日台比較及び男女差を検討することが目的であった。日本の大学生 134 名（男性 61 名，女性 73 名）及び台湾の大学生 92 名（男性 37 名，女性 55 名）を対象に検討した結果，“自分ひとり”，“父親”，“きょうだい”において日台間の主効果が有意であり，いずれも日本に比して台湾の得点が高かった。また，“現学校以降の友人”において性の主効果が有意であり，男性に比して女性の得点が低かった。さらに，“自分ひとり”は交互作用も有意であったため，単純主効果検定を行った結果，女性において日本に比して台湾の得点が高かった。

キーワード：居場所（安心できる人），日台比較，大学生

Ⅰ．問題と目的

岡村（2015）は，「居場所」を「安心していられる場所」と定義づけ，「時間（安心できる時）」，「空間（安心できる場所）」及び「人間（安心できる人）」という 3 つの要素の中で，安心できる人との関係が「居場所」の基盤となることを指摘した。これまでの研究において，安心できる人の評定が比較的高い者は母親，友人，恋人であり（岡村・豊田，2016；岡村，2019），特に男性においては女性に比して自分ひとりで過ごすことに安心を感じる傾向が高い（岡村，2018）ことが明らかになっている。

しかし，従前の研究は全て日本の大学生を対象としており，海外の大学生が安心できる人をどうとらえているのかは明らかにされていない。安心できる人の評定の差異は文化的な影響を受けている可能性があり，海外の大学生と比較することで検討が可能であると考えられる。

そこで本研究では，日本に近く，かつ深い交流がある台湾に着目し，安心できる人の評定を地域間及び性別比較検討することにより，安心できる人における文化的影響を検討する。台湾は伝統的家族構造として父権制，家族主義が特徴であり，家族中心の社会と家族本位の文化である（宋，1986）。しかし，近年は権威主義が弱くなり，結婚の自由化により男女平等の傾向が強まってきており（宋，1986），女性の社会進出が進み，社会的立場が改善のさなかにある（亜洲奈，2012）。また，日本と台湾は家族に対する心理的距離が同じ傾向にあるという指摘（若井・

鄭，2013）もあることから，安心できる人評定における日本と台湾の異同を検討することは意義深いと考えられる。

Ⅱ．方法

1．調査対象者

日本の調査対象者は近畿圏内に在住の大学生 134 名（男性 61 名，女性 73 名），平均年齢は 20.95 歳（*SD*.50）であった。台湾の調査対象者は台北市内の大学生 92 名（男性 37 名，女性 55 名），平均年齢は 21.82 歳（*SD*2.86）であった。

2．調査内容

学年の明記を求めるフェイスシートの他，下記項目を印刷した調査用紙を用意した。調査内容を図 1 に示す。

⑴　日本版居場所（安心できる人）調査

“あなたは以下の状況になった時，それぞれどのように感じますか。あてはまる数字にそれぞれ 1 つずつ〇をしてください。ここで用いている「安心できる」とは，ホッとする，落ち着く等という意味です。”という教示を行い，“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”“恋人”といる場面における安心感を測定する設定を行った。現実に上述の人物が存在しないことも想定されたため，併せて“もし以下の人がいない場合は‘もしいたとしたら’と仮定してお答えください。”と教示した。

⑵　台湾版居場所（安心できる人）調査

⑴で示した教示文を繁体字中国語に翻訳して実施した。具体的には，日本在住と台湾在住の日本語・中国語のバイリンガルにそれぞれ翻訳を依頼し，日本語から繁体字中国語に翻訳された。両者の翻訳を比較し，同一の文言であったものはそのまま採用した。両者で文言が異なった場合は，協議の上，文言を修正した。上述の手続きを行ったことにより，日本の調査内容と比して十分な等質性が得られた。

3．調査手続

第 1 著者が担当する授業終了後に上述の調査用紙を配付し，以下に示す調査を集団的に実施した。

⑴　日本版居場所（安心できる人）調査

2．⑴に記述した調査項目について，“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”“恋人”といる場面において，それぞれ“5：非常に安心できる”から“1：あまり安心できない”の 5 件法で回答を求めた。

⑵　台湾版居場所（安心できる人）調査

3．⑴で示した教示を繁体字中国語に翻訳して実施した。翻訳は 2．⑵で示した方法と同様に行われた。

⑶　倫理的配慮

調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には，調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと，結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないこと，調査への回答は自由意志であり，調査内容の一部またはすべてに回答しなくても個人の不利益になることは決してない旨を明記し，調査実施前にも口頭で上述の説明を行った。

4．調査時期

日本は 2020 年 1 月，台湾は 2020 年 6〜7 月に実施した。

あなたは以下の状況になった時，それぞれどのように感じますか。
あてはまる数字にそれぞれ１つずつ〇をしてください。
※　ここで用いている「安心できる」とは，ホッとする，落ち着く等という意味です。
※　もし以下の人がいない場合は“もしいたとしたら”と仮定してお答えください。

どのように感じるか ＼ 以下の人といる場合	非常に安心できる	とても安心できる	安心できる	やや安心できる	あまり安心できない
1.　自分ひとりの場合	5	4	3	2	1
2.　父親といる場合	5	4	3	2	1
3.　母親といる場合	5	4	3	2	1
4.　きょうだいといる場合	5	4	3	2	1
5.　現学校入学以前の友人といる場合	5	4	3	2	1
6.　現学校入学以降の友人といる場合	5	4	3	2	1
7.　彼氏または彼女といる場合	5	4	3	2	1

在遇到以下的狀況時，你會分別有哪些感覺呢？　符合自己狀況的數字請打圈。
※ 這裡使用的「能夠安心」是指放心的意思。
※ 若是沒有以下的對象，則請假設“如果有的話”來作答。

感覺如何 ＼ 跟以下的人在一起時	感到非常安心	感到很安心	感到安心	稍微感到安心	不太能安心
1.　自己一人時	5	4	3	2	1
2.　跟父親在一起時	5	4	3	2	1
3.　跟母親在一起時	5	4	3	2	1
4.　跟兄弟姐妹在一起時	5	4	3	2	1
5.　跟進入現在學校前的朋友在一起時	5	4	3	2	1
6.　跟進入現在學校後的朋友在一起時	5	4	3	2	1
7.　跟男女朋友在一起時	5	4	3	2	1

図１　調査内容（上：日本版　下：台湾版）

Ⅲ．結果と考察

1．地域別及び性別安心できる人評定

各場面における「安心できる人」評定得点を地域別及び男女別に集計した。結果を表1に示す。日本・台湾ともに評定得点は中点である3を上回っており，自他への安心感の高さがあることが伺える。

各場面における「安心できる人」評定得点において，2（地域：日本・台湾）×2（性別：男性・女性）の2要因分散分析を行った。その結果，“自分ひとり”において，地域間の主効果（$F(1,219)=18.14$，$p<.001$，$\eta^2_p=.08$）が有意であり，交互作用（$F(1,219)=9.35$，$p=.003$，$\eta^2_p=.04$）も有意であったため，単純主効果検定を行った結果，女性において日本に比して台湾の方が得点は高かった。日本における研究において女性は男性に比して，自分ひとりで過ごすことに安心を感じる傾向が低い（岡村，2018）。しかし，本研究において，台湾は日本のような傾向は認められなかった。これは，台湾の女性における独立志向が影響している可能性があるものと考えられる。近年は台湾において「賢妻良母」（日本語の良妻賢母と同義）から「女強人」（キャリアウーマン）という言葉がよ

表1　地域別及び男女別各場面における「安心できる人」評定得点

安心できる人		日本		台湾		地域間		性別間		交互作用	
		男性	女性	男性	女性	F	η^2_p	F	η^2_p	F	η^2_p
自分ひとり	n	60	71	37	55						
	M	3.87	3.30	4.03	4.27	18.14 ***	.08	1.48	.01	9.35 **	.04
	SD	1.17	1.03	.69	.78	日本＜台湾				女性：日本＜台湾	
父親	n	59	67	37	55						
	M	3.61	3.31	4.05	3.91	10.24 **	.05	1.85	.01	.22	.00
	SD	1.23	1.29	.94	1.08	日本＜台湾					
母親	n	61	72	37	55						
	M	3.85	4.17	4.24	4.27	2.85	.01	1.36	.01	.94	.00
	SD	1.19	1.14	.93	.91						
きょうだい	n	60	71	37	55						
	M	3.58	3.72	3.97	4.09	6.48 **	.03	.71	.00	.00	.00
	SD	1.23	1.20	.80	.93	日本＜台湾					
以前友人	n	61	72	37	55						
	M	4.07	3.85	4.27	4.09	2.59	.01	2.04	.01	.02	.00
	SD	1.09	1.18	.69	.84						
以降友人	n	59	71	37	55						
	M	3.92	3.56	4.00	3.82	1.61	.01	3.99 *	.02	.40	.00
	SD	1.06	1.09	.67	.86			男性＞女性			
恋人	n	59	64	37	55						
	M	4.14	3.91	4.30	4.04	1.09	.01	3.08	.01	.01	.00
	SD	1.06	1.06	.81	.98						

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

く使われるようになり（亜洲奈，2012），若年層ほどその傾向が強いとされている（謝，2000）。また，台湾は従前より他の隣国と比して男女ともに労働力率が高いことが特徴とされている（瀬地山，1996）。すなわち，日本のような女性が専業主婦である割合が低く，男女共働きを行う傾向が強いことが伺える。上述の文化的背景が女性の“自分ひとり”への安心感の高さにつながったものと考えられる。

“父親”及び“きょうだい”において，地域間の主効果（“父親”は $F(1,214)=10.24$，$p=.002$，$\eta^2_p=.05$，“きょうだい”は $F(1,219)=6.48$，$p=.012$，$\eta^2_p=.03$）が有意であり，いずれも日本に比して台湾の方が得点は高かった。岡村・豊田（2016）は，男性において，自分ひとり・母親・友人と比して“父親”及び“きょうだい”の安心できる評定が低く，女子において，友人に比して“自分ひとり”及び“きょうだい”の評定が低いことを明らかにした。一方，本研究において，台湾は日本とは異なり，“父親”及び“きょうだい”の安心できる評定が高い傾向が伺える。これは，台湾における父権制，家族主義の特徴が色濃く反映されているものと考えられ，台湾における大学生の“父親”及び“きょうだい”への安心感の高さにつながったものと考えられる。

“現学校以降の友人”において，性別間の主効果（$F(1,218)=3.99$，$p=.047$，$\eta^2_p=.02$）が有意であり，女性に比して男性の方が得点は高かった。渡辺（2014）は，新しい友人関係がスタートする際に，先行する関係が消滅するわけでなく，同時進行的に関係が存在することを指摘した。居場所は時間的な積み重ねを要するという指摘（中谷，2011）があるが，本研究結果は，新しい友人に対する安心感の形成には性差がある可能性が伺える。ただし，主効果の効果量は .02 とやや小さく，本研究結果の解釈には慎重を要する。

2．今後の検討課題

本研究における今後の課題を 2 点述べる。

第 1 に，居場所（安心できる人）の構造に関する検討である。杉本・庄司（2006）は，個人を取り巻く「居場所」を包括的に捉えるために，「居場所環境」という視点を提案した。「居場所環境」とは，どのような特徴を持った「居場所」を，どのようなバランスで有しているかを表すもので，個人が有する複数の「居場所」を総合的に捉えることが特徴である。具体的には，自分ひとりの居場所，家族のいる居場所，友だちのいる居場所の単一または複

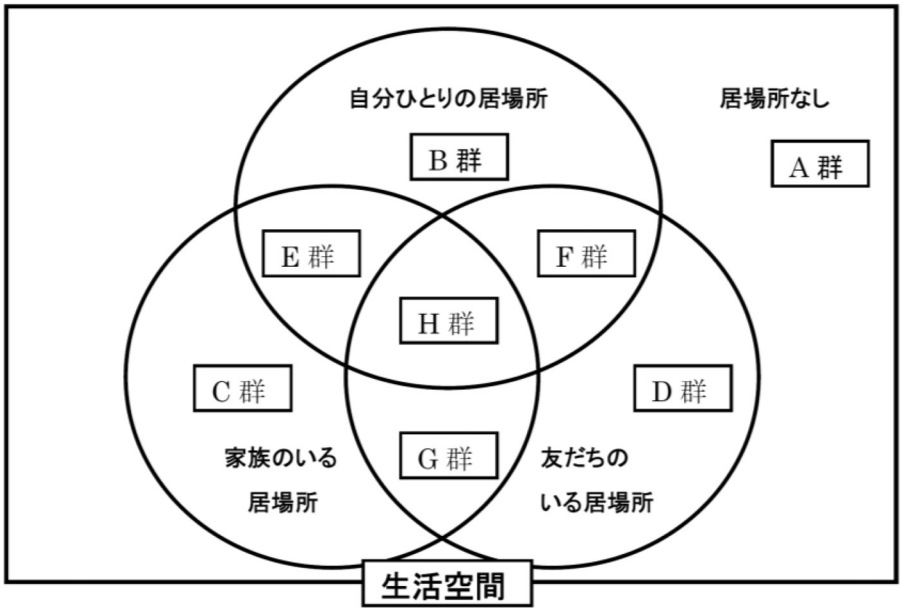

図 2　「居場所環境」の分類図（杉本・庄司，2006）

数の組み合わせによる7分類に加え，「居場所なし」を含んだ8分類によって構成されている。分類図を図2に示す。Okamura（2008）は，日本の女子大学生・専門学校生を対象に，安心できる人の多重選択を数量化3類により検討した結果，“自分ひとり”“家族”“友人・恋人”の3群に分類でき，「居場所環境」の妥当性を見いだした。今後は日本で見いだした「居場所環境」の構造が台湾でも適用可能か否かを検討する必要がある。

第2に，安心できる対自及び対他志向と関連する要因の検討である。対自志向において，岡村（2018）は，日本の大学生において，自分ひとりの居場所を志向する要因は，ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており，さらに両者の関係には孤独感や不安感のなさが媒介していることを指摘した。今後は，台湾においても同様の要因が規定されるのか検討が必要であろう。また，対他志向において，童・前原・金城（1994）は，日本と台湾の女子大学生ともに，母親との情緒的結合が強いという傾向を見いだした。豊田・岡村（2008）は，家族との親密性が強いほど，安心できる人における“家族”への評定が高いことを明らかにした。今後は，家族との親密性の要因も含め，検討する必要があると考えられる。

引用文献

亜洲奈みづほ（2012）．スーパーレディの社会進出　現代台湾を知るための60章【第2版】（エリアスタディーズ34）（pp. 171-175）　明石書店

童　昭恵・前原武子・金城育子（1994）．自己概念と愛着：日本と台湾の大学生の比較　日本教育心理学会第36回総会発表論文集，257.

謝　雅梅（2000）．台湾女性のパワー　日本に恋した台湾人（pp. 191-200）　総合法令出版

中谷陽輔（2011）．届場所を感じる自己　榎本博明（編著）　自己心理学の最先端：自己の構造と機能を科学する（pp. 141-151）　あいり出版

Okamura, T.（2008）．Classification of *Ibasho* “Person who eases your mind” in female undergraduates Poster presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany.

岡村季光（2015）．一人ひとりの「居場所」をどうつくるか　梶田叡一（責任編集）・人間教育研究協議会（編）実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA型学力をどう育てるか（教育フォーラム55）（pp. 111-121）　金子書房

岡村季光（2018）．「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討－“自分ひとり”ですごす居場所に注目して－　奈良学園大学研究紀要，*8*，191-197.

岡村季光（2019）．居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連　奈良学園大学研究紀要，*11*，27-32.

岡村季光・豊田弘司（2016）．「居場所」（安心できる人）を規定する要因―ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討―　奈良教育大学紀要（人文・社会科学），*65*(1)，27-34.

瀬地山角（1996）．東アジアの家父長制：ジェンダーの視点から　勁草書房

宋　明順（1986）．親族・家族構造の変化　戴　國煇（編）　もっと知りたい台湾（pp. 114-123）　弘文堂

杉本希映・庄司一子（2006）．中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究　学校心理学研究，*6*(1)，31-39.

杉本希映・庄司一子（2007）．子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究，*40*，81-91.

豊田弘司・岡村季光（2008）．人間関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響（２）：家族関係による検討　日本発達心理学会第日本発達心理学会第19回大会発表論文集，359.

若井理恵・鄭　躍軍（2013）．家族に対する心理的距離の計測方法：東アジア価値観国際比較調査データを用いた尺度の考案　第41回日本行動計量学会大会抄録集，156-157.

渡辺　舞（2014）．大学の友人関係は変化するか？：大学 4 年間の追跡的検討による大学適応感との関連について　北星学園大学大学院論集，*5*，67-81.

付記

本研究において，奈良学園大学人間教育学部の山田明広先生に多大なご協力を得ました。記して感謝申し上げます。